共に在り続けるために

小田　刻原

私がこの学校を選んだ理由の一つとして色々な人たちと共に暮らしていきたいという

想いがあったからである。そして、その通りこの愛農学園農業高等学校では、

共同で仕事をする部門があり、ほかの学校と比べると多い学校行事、

そしてなにより全寮制であること。寮では皆で協力して掃除をしたり、

さらに炊事というご飯を準備する係まである。こういうところを見るとやはり、

愛農精神の中に「人を愛する」というものが入っている事にも納得できる。

そして、ここから見えてくることは、この学校は色々な人たちと共に生活していくこと、

すなわち共存していくことを重要なことの一つとして考えているのだと思う。

しかしなぜ共存というものを大切にしているのだろうか。

私は共存というものには大きく二つ重要なことがあると思う。

一つ目は、互いにまたは、複数で支えあっているか、ということ。誰かだけが頑張るだけでなく皆が頑張ることが私は共存というものの本質だと思う。

そして二つ目、それは単独ではできないということ。あまり重要には思えないが

これができなければ共存という前に、根本的な問題になってしまう。

そして、この共存の具体例として挙げられるのが動物だ。しかし、動物だと抽象的すぎるのでここではペンギンという具体例を出そう。ペンギンは親が交代交代で子育てをしており、狩りに行き栄養を蓄える係とその間、子供を足元で温める係とで

役割分担している。ペンギンたちはこれをサイクルして共存していっている。

そしてこのペンギンたちを天敵のシャチが食し、そのシャチを他の生物が食べていく。

こういった弱肉強食の無常な世界も一種の共存の形なのかもしれない。

私たちもこの学校の中で形は違えど共存しているのだ。共に炊事をし、食のありがたみを分かち合い、他者とのコミュニケーションを交えながら、意見を共有しあう、一見くだらないことだがそれはとても大切なことだと私は考える。

しかしそれとは逆に共存できていないものがあるのも事実だ。相手を考えない勝手な判断や相手への完全に一方的頼み、考え直さなければいけないことはまだまだたくさんある。

そして私はこのことに関して、植物も同様だと思う。私は植物は共生はしているが共存はしていないと考える。確かに植物はたがいに寄り添い支えあっている、ように見える。

しかしそれはただ共に生きている共生でしかない。そしてここで先ほどの話が出てくる。そう、植物はたがいにまたは複数で支えあっているわけではないということ。植物は根をはりめげらせ、ゆっくりと背を伸ばし、子々孫々のため種、花粉を飛ばす。そこには、生存競争というものしか存在しない。共存と一言でいうが実際はもっと複雑で難しものなのだ。

最後に私はここまで話してきたがあえて言うと私はみんなが共存試合幸せになることは不可能だと思う。みんなが共存しあうなんてことは理想論でしかない。なんだって誰にだってそれぞれの考えがあり、それぞれの価値観があり、百人に同じ質問をして百人が同じ回答をするわけではない。だから問題だって起こるし、大きくなれば戦争という惨劇にもなりかねない。だからこそそこで正しい選択、判断をし、ときにはしっかりと制裁をし、

少しでも共存しあえる、支えあえる環境にしなければならない。そして話は戻るが、それはこの学校でも同じだ。様々な考え方、価値観の違いを共に生活していくうえで読み取っていかなければならないと私は思う。そしてこのことを愛農学園農業高等学校で私は学ぶ。ともに在る続けるために。

*Fin*

**